

民藝の擁護

松井健著

「民藝」とは「民衆的工芸」

五〇余年が経過した今、著者

ある人々にとって「民藝」

の略語である。美は、芸術家
によってのみ作り出されるの
ではなく、むしろ、市井の人

は柳宗悦と「民藝」が「擁護」
を要する状態にあると考えて
いる。

は、固定化された美の基準と
して映っている。だが、著者
の認識はまったく違う。今も
変貌を続ける精神運動である

々によって生み出され、日常
生活に「もの」として寄り添
っている、と柳宗悦は言った。

「民藝」を批判する者から
だけではない。実態をともし
わない「民芸品」を作るなど

と認識されている。
高次の宗教哲学者であり同

「民藝」を論じることと柳は、
容易に言語化できない民衆の
生に潜む美の力を表現しよう
とした。だが、柳の没後から

して「民藝」をあまりに俗化
する動きから、また、柳の言
説を「教条」的に理解し、「き
わめて深刻な民藝の概念化の

時に美の使徒だった柳とその
軌跡を主体的かつ実証的に語
る好著である。（里文出版、
2000円）